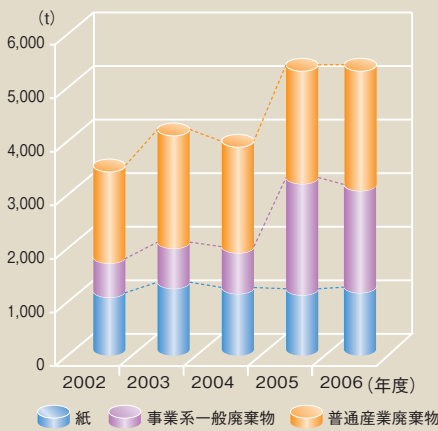


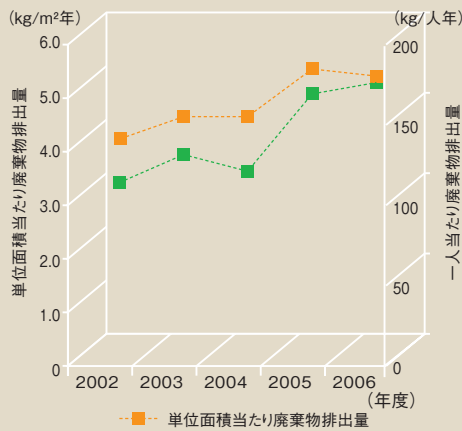
廃棄物等排出量及びその低減対策

廃棄物の削減にむけて、
活動の基盤となるデータ信頼性の
向上に努めました。

生活系廃棄物排出量は前年とほぼ同じ



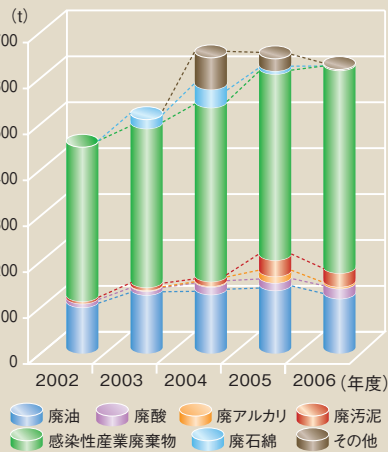
生活系廃棄物総排出量



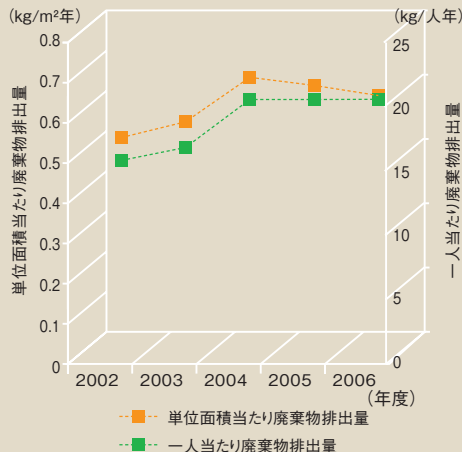
生活系廃棄物排出量原単位

2006年度、京都大学では、年間約5,400トンの生活系廃棄物を排出しました。一人あたりでは約170kgとなります。排出量総量はほぼ横ばい、単位面積当たり排出量は減少しましたが、一人あたり排出量は増加しています。排出量は近年、増加傾向にあります。排出量の把握が進んできたことも影響していると考えられます。

実験系産業廃棄物排出量は前年よりわずかに減少



実験系/特別管理産業廃棄物総排出量



実験系/特別管理産業廃棄物排出量原単位

年間約600トンの実験系産業廃棄物を排出しました。前年度より減少しましたが、廃石綿（アスベスト）の処理が一段落したことが一因と考えられます。

図22 京都大学の廃棄物排出量



データの検証

環境管理を行ううえで、事業活動がどのくらい環境負荷をかけているかを定量的に示すデータは欠かせません。

京都大学では数年前から組織的に環境負荷データ収集を行ってきましたが、当初はデータの質の検証まで行われることはまれでした。しかし、環境報告書の作成を通じて経年データを整理するうちに、見直しが必要と思われるデータも明らかになってきました。そこで、特にその傾向が見られた廃棄物について検証・修正を行った結果を報告します。

廃棄物データの見直しをするにあたって注目したのは、経年変化と単位面積当たり排出量です。これらに不自然な点が見られる部局へ実際に現地調査を行い、信頼性を一つひとつ確認していきました。その結果、環境報告書2006年度版公表以降の環境負荷データ修正箇所は36箇所にとどまり、そのうち24箇所が廃棄物が関係する部分でした。環境報告書2006年度版公表以降のすべてのデータ修正は本報告書のデータ集に反映するとともに、修正箇所一覧として添付しました。

京都大学では、今後とも環境負荷データの精度向上と公表に努めていきます。

手順書類の制定

データを修正するだけでは問題の解決にはなりません。正確なデータを継続的に収集する仕組みをつくることが重要です。そのためには、データ収集に係るすべての職員の意識と手順を統一することと、出てきたデータのチェックを組織的に行う必要があります。そこで、2006年度は環境負荷データの収集と報告の方法を記した「環境負荷データ監視及び測定手順書」を作成・配布しました。廃棄物データ収集・報告の方法についても特に詳しく記載されており、担当者に変更があっても対応できるよう配慮しています。

講習会の実施

前述の手順書をもとに、講習会を実施しています。2006年度は、環境負荷データの取り扱い方法、特に廃棄物データの取り扱いに重点をおいて解説しました。事務職員を中心に65名の参加がありました。

目標の立案

環境負荷データは、最終的には的確な目標立案と実績検証のために収集しています。京都大学では、上記のような手法で信頼性を確認した廃棄物等のデータをもとに、環境目標管理システム推進検討ワーキンググループにおいて、2007年度環境目標を立案しました(21ページ参照)。その主な方針の一つが「廃棄物による環境負荷の低減」です。これまで整備してきた環境負荷データをもとに、2007年度は目標達成のために着実な計画実施を行っていきます。